

連載 オブジェクト指向と哲学

第 89 回 デカルト、炉部屋の夢(8)- 本質を考える

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

ノーベル文学賞を受賞されたカズオ・イングロ氏の「日の名残り (The Remains of the Day)」は、第 1 次世界大戦後から第 2 次世界大戦後までの英国のある執事の物語です。主人公は「偉大な執事とは何か？」を生涯追求し、自ら信じる道を実践します。それは、ソクラテスが何度も取り上げている「徳とは何か？」と重なります。

●蜜蝋とは何か？

デカルトは省察 2 で蜜蝋を例にして、モノの本質とはいったい何か、それをどうやって捉えるのか、を考察する。

--

これは、いましがた蜂の巣からとりだされたばかりである。まだそれ自身の蜜の味をまったく失っておらず、もとの花の香りもなおいくらかは保っている。その色、形、大きさは明白である。(省略) 結局、ある物体をできるだけはっきり認識するために必要と思われるものは、すべてこの蜜蝋にそなわっているのである。[1]

--

蜜蝋とは何かを感覚で確かに捉える。しかし火を近づけるとすっかり変質してしまう。

--

この蜜蝋を火に近づけてみるとどうであろうか。残っていた味はぬけ、香りは消え、色は変わり、形はくずれ、大きさは増し、液状となり、熱くなり、ほとんど触れることができず、もはや、打っても音を発しない。[1]

--

はじめに感覚で確かに捉えた筈の特質はことごとく崩れ去る。これはもはや蜜蝋とは別のものなのか？

--

これでもなお同じ蜜蝋であるのか。そうである、と告白しなくてはならない。だれもそれを否定しない。だれもそうとしか考えない。[1]

--

蜜蝋を感覚で説明するためには、固まっているものと溶けたもの全く異なる 2 つの説明をするしかない。感覚で捉えられない蜜蝋の本質というものはいったい何か。それはどうやって捉えることができるのか？

●蜂とは

この「蜜蝋とは何か？」というデカルトの考察は、プラトンの対話篇「メノン」の蜜蜂の例えを思い出させられます。ソクラテスは、メノンに「徳は教えられるか」と尋ねられ「自分は徳とは何かすら知らないのです、そんな質問に答えることはとてもできない」と答えます。メノンは、例をあげながら徳の説明をします - 男の徳、女の徳、子供の徳、年配の者の徳、召使の徳...といくらでも説明できると答えます。しかし徳そのものの説明にはなっていないことをソクラテスに指摘されてしまいます。

ここは要約してしまわないで訳書そのまま転記します。

--

ソクラテス：

ずいぶんぼくも運がいいようだね、メノン、徳は 1 つしかないというつもりでさがしていたのに、徳がまるで蜜蜂のように、わんさと群れをなして君のところにあるのを発見したのだから。しかしだね、メノン、ついでにこの蜜蜂の譬えを使って言うと、かりにもしぼくが蜜蜂というものの本質について、それはいったい何であるかとたずね、それに対して君が、蜜蜂にはいろいろたくさん種類のものがあると答えたでしょう。その場合、ぼくがもし次のように質問したとしたなら、君は何と答えるかね。

「蜜蜂にはいろいろとたくさん種類があつて、それらは互いに異なったものであると言うのは、それらが蜜蜂であるという点においてそうなのだ、君は主張するのかね？それとも、その点では、それらは互いに少しも異なるものではなくて、何かほかの点、たとえば美しさとか、大きさとか、その他そういった何らかの点で異なっているのかね？」

こうきかれたら、君は何と答えるかね？言ってみてくれたまえ。

メノン：

むろんこう答えるでしょう。- それらの蜜蜂は、蜜蜂であるという点では、どれをとってくらべてみても、互いにすこしも異なるものではないと。

ソクラテス：

では、次にこうたずねたとしたら？

「それなら、ぼくが君に言ってほしいのは、その肝心のものなのだよ、メノン。つまり、それ

らの蜜蜂が、その点ですこしも異ならず全部同じであるところのもの、それを君は何らかの答えをぼくに言うことができるだろうね。」

メノン：

ええ、できます。[2]

--

それができるなら徳はどうか。蜜蜂は時代を越えソクラテスにもデカルトにも身近な存在であったことに興味を覚えます。デカルトが対象としているのは蜜蝋という具体的な物質であり、ソクラテスが対象としている徳はそうではありません。本質という直接感覚できないものを考えている点は同じです。

●偉大な執事とは何か？

「日の名残り」で、主人公は偉大な執事の道を生涯追求し、実践します。偉大な執事の条件は、仕事能力だけではなく品格が不可欠だと考えます。当時、同業者の間でこの人こそが偉大な執事であると見なされていた人を挙げてゆきます。彼らの共通点は、大きな屋敷の雇主に仕えていること、しかもその雇主自身もその屋敷に見合う品格を備えていることです。主人公にとって自分の父こそ偉大な執事であり、自分が全身全霊で仕えていた雇主は道徳的巨人です。

--

「偉大な」執事とは何か？この問題には、どうやら私がこれまで十分に考えてこなかった側面があるようです。私の重大な関心事であり、長年、考えを積み重ねてきたつもりの問題であるだけに、いまになってそのようなことを気づかされるのは、心中穏やかならざるものがあります。しかしヘイズ協会への入会資格のいくつかを「古臭い」の一言で片付けたのは、やはり軽率のそしりを免れなかったかもしれません。もちろん「品格」と「偉大さ」の決定的な結びつきについては、これまで申し上げてきたことを翻すつもりはありません。それははっきりしております。が、私はいま、ヘイズ協会の別の声明について考えていたのです。すなわち、会員になるための第1の条件は「入会申請者が名家に雇われていること」である、というくだりです。[3]

--

執事協会の加入資格の判定に「名家に雇われていること」とありますが、では「名家」とは何か？という問題になります。協会の考える名家と主人公が考える名家にすれ違いがあります。

--

私は、私どもの世代のほうはずっと理想主義的であると申し上げたいのです。雇主に爵位があ

るかどうか、伝統ある「旧家」かどうか – 前の世代にとって最大の関心事であったそうしたことより、私どもは雇主の徳の高さを重視する傾向があると存じます。[3]

--

●徳は教えられるか？

メノンの「徳は教えられるか？」の問いかけに、ソクラテスは当時アテネで徳のある政治家として知られていた人々の名を挙げます。しかし、彼らの子は何らかの能力を身にはつけているが、その父のような徳ある人と呼べるだろうか。もしも徳が教えられるなら、どうして自分の子に教えないことがあるのか。

●内包と外延

概念には名前と内包／外延があります。内包は概念の本質を言葉で説明します。物理的なものなら説明できますが、物理的でないものや抽象概念を言葉で説明するなら言い換えしかできません。言い換えた言葉の説明はまた別の言葉に言い換え、結局元に戻ってしまいます。

デカルトは省察 2 でこんなことを言っています。

--

以前私は自分を何であると考えたのか。もちろん、人間であると考えたのである。しかし人間とはなんであるか。理性的動物というべきであろうか。そうではない。なぜなら、そうすると、そのあとで、動物とは何か、理性的とは何か、と問わなければならなくなり、こうして1つの問題からいくつもの、しかもいっそう困難な問題へ、はまりこんでしまうからである。いま私は、そのような詮索に時間を浪費しようと思うほどひまではないのである。[1]

--

外延は概念の具体例の列挙なので、そこから人は言葉にできない本質を推測することができます。徳のあると思われている人達や、偉大な執事と認められている人達の名前を挙げてその本質を推測します。

以下、次回...

参考書籍

[1]デカルト、[訳]井上庄七／森啓／野田又夫、省察／情念論、2002、中公クラシックス

[2]プラトン、[訳]藤沢令夫、メノン、1994、岩波文庫

[3]カズオ・イシグロ、[訳]土屋政雄、日の名残り、2001、早川書房